

## 【生活科】

### 自分らしさを発揮し主体的にかかわる子どもを育てる生活科の学習

#### 1 研究テーマ設定の理由

##### (1) めざす子どもの姿

生活科の究極のねらいは、子ども一人ひとりに学習活動を通して「自立への基礎」を養うことである。そして私たちの生活科学習のめざす”子どもの姿”とは自分のまわりのもの・こと・ひとなどの対象に対して、子どもが子どもらしく夢中になって全身でぶつかっていきこうとする、子ども本来の姿である。具体的には以下の”子どもの姿”としてとらえている。

##### ①対象に意欲的にかかわる子ども

生活科は子どもの生活圏である身近な環境としての学校、家庭、地域が学習の場となる。身近な環境とは、身近な社会環境、身近な自然環境であり、子どもの生活環境である身近な社会や自然をさしている。子どもが身近な社会とかかわりを持つということは、学校や家庭、近所、公共施設の様子がよくわかり、その上でよりよい生活を目指すことである。

また、自然などとかかわりをもつということは、飼育や栽培活動などの活動を通して、動植物の成長や変化の様子がよくわかり、その上でそれらを大切にしたり、愛情をもって接したり育てたりすることである。子どもたちは自分を取り巻く社会や自然に没頭しながらかわり、そのかわりの中から自分なりの切実な問題意識をもって、調べたり、考えたり、表現したりすることが大切である。そのためには対象である学校、家庭、地域における対象等に意欲的にかかわっていくことが重要になってくると考えた。

##### ②活動や体験を実感する子ども

生活科の学びの中核は「具体的な活動や体験を通じた学び」であり「自分のよさや可能性を発揮した学び」である。自分のよさや可能性に気づき、心身ともに健康でたくましい自己の形成ができるようにすることは、自立への基礎を養う上でとても大切である。そして具体的な活動や体験を通して生まれる発見や疑問は、子どもの思いや願いと密接にかかわっている。「大きくなあれ」の実践では、次のような場面にも出会った。

A君は畑でなすびやキュウリの栽培活動を行った。毎日水をやったり草を引いたりする中で野菜に愛着を持つようになってきた。ある日畑に行って葉を触って見たときの様子を次のように書いていた。

----- 子どもの日記より -----

★きょうは はたけにいて なすびのはっぱを さわってみたら てが  
ちくちく しました。はなの においをかいでみると いいにおいがし  
ました。うちのところには ダンゴムシが たくさんいました。たべ  
られないか しんばいです。

自分の育てている野菜に対する思いが鼻で臭いを嗅ぎ、手で触って確かめてみる行動を生んでいる。また、A君の野菜に対する思いも強く感じるができる。これは具体的な活動や体験を通した学びから生じた子どもの本当の思いや願いである。

このように「活動や体験を通した」また、「活動や体験ならではの子ども力」を考えてみると、子どもの活動や体験と思いや願いとは切り離して考えることはできない。子どもの思いや願いは、自分とのかかわりで対象物をとらえる力を生み出しているからである。そして、自分とのかかわりで対象物をとらえる力は

- ・対象物に積極的に働きかけようとする意欲や態度
- ・対象物を見つめる観察力
- ・対象物の存在を諸感覚を働かせて感じ取る感受力

などの育ちと同一である。

これらの力は活動や体験を通してこそ得られる子どもの力である。そして相互に関連し合いながら「知的な気づきや」「表現力」のもとになっていると考えることができる。

### ③よさを発揮できる子ども

子ども一人ひとりの、能力、適性、興味・関心、性格、ものの見方や考え方、感じ方など様々である。これらのものは、その子の持ち味であり、取り柄となるといえる。持ち味や取り柄には「これだけ」「ここまで」というよさの基準はなく、すべてがその子なりのものである。大切なことは、これらが学習の場で存分に発揮されることであり、友だちに認められることである。学習の場面場面でその子なりに発揮される自分らしきこそ、子どものもつよさである。では、この子どものもつよさを発揮して身につく力とはどのようなものであろうか。1年生の「お父さんにインタビュー」の授業で振り返ってみることにする。ここでは3つの質問観点を決め、自分のお父さんに聞き取りを行ってきた。その聞き取って来たことを自分の行ったお手伝いとあわせて友達の前で発表するという学習展開である。自分やお父さんの仕事を自慢するときの子ども表情が、いつもに増して生き生きとしていたことが印象的であった。自慢できたり自慢できるものがあるということは、振る舞いの中に「活力」や「ゆとり」が生まれるからであろう。このような「活力」や「ゆとり」は他人の「よさに共感的に気付く」心の余裕を生む。また、友だちのよさを探した子どもたちの心根から「共感的に人間を理解する能力」の芽生えを感じ取ることができる。すなわち、よさを発揮して学習に取り組むことで

- ・子ども自身の「有用感」
- ・「自分の自信」や「取り柄の自覚」
- ・「活力」や「ゆとり」
- ・「共感的に人間を理解する能力」

などが身に付いてくるものと考えている。

以上 めざす子どもの姿をもとに、

「自分らしさを発揮し主体的にかかわる子どもを育てる生活科の学習」と本年度の研究テーマを設定した。

子どもは「もの・こと・ひと」とかかわる中で学習対象に主体的に取り組むことができる。そのために、子どもたち一人ひとりが対象の良さに十分に浸り込むことができる活動、すなわち意欲的に対象にかかわっていくことを大切にしたいと考えた。そして具体的な活動や体験を通して、よりよいかかわり合いの姿を身につけさせると同時にその中に自分らしさを発揮させた。

また学習活動が主体的に展開されるためには子どもの中から育った問題意識を大切にすることである。そのためには、子どもたちの思いや願いを育てること、育った思いや願いが実現に向けて取り組んでいけるという意識を持たせることである。このことが主体的に学習する上での意欲やエネルギーになる。この思いや願いを育てるためには、対象と直接かかわるような活動や体験を通すことが大切である。対象とかかわることで、子ども自身の中に、様々な思いや願いが生まれてくる。自分の思いや願いにたっぷりと浸りきらせることが大切である。そして、この生まれてきた思いや願いをお互いに交流すること、いわゆるまなざしを共鳴させることで、さらなる学習のひろがり結びつけていけるのではないかと考えた。

## (2)「意味と内容」がひろがる生活科の学び

子どもたちが生活科を学習する「意味」はとりもなおさず自立への基礎を養うことにあたる。子どもたちの自立への基礎作りは生活科の学習に限ったことではないが、生活科の担う役割は大きい。少子化・都市化・過度の受験戦争の中、自然や社会とのかかわりの少ない子どもたちが増えている。このような背景を背負って登校してくる子どもたちに、自分の考えで行動し、いろんな社会事象や自然事象すなわち「もの・こと・ひと」にかかわりながら、試行錯誤してみる力や今盛んに言われている「自立」する力をつけていくことが必要である。ただ、生活科は「自立への基礎を養う」ことにあり、子どもたちをすぐさま自立させることではない。自立への基礎を身につけさせるのであるから、いろいろな内容が考えられる。

1年生では、自立の基礎となるものは、自らの好奇心でいろいろなことをやってみることである。いろいろなものに触れたり、眺めたり、匂いをかいだり試したり、作ったりする活動を、自分の好奇心で行うことのできる時間と空間、仲間を保障させることが大切である。しかし、このことは学校生活だけでは不十分であるから、学校で生活主体として活動するきっかけを見つけておいて、地域や家庭との連携を図りながら展開していくことも心に留めておかななくてはならない。そうする時に、自分がやりたいことを一人でやるのではなく、他の人、例えば友だち、学校のお兄さんお姉さん、家の人、地域の人等々とやっていくことになる。また、活動を通してその人たちとの人間関係の中で自分がしたことに対する他の人の反応、つまり他の人と言葉や身体表現、時には体でぶつかりあいながらコミュニケーションをもちながら学ぶことになる。

一人ひとりの子どもが具体的な活動や体験を通して、学習を効果的に展開する中で、人間として人間らしく生きるために、学んだことを生きる力に転化しうる学習活動に作り上げていける。そしてさらにはこのことが「自立への基礎を養う」ことへとつながるのであり、意味と内容がひろがるものととらえた。

私たちの生活科学習での「意味と内容のひろがる学び」とは活動や体験を通して集団や社会にかかわり、よりよい自分の役割や行動の仕方をふくらませていくことであると考えた。

## 2 生活科学習でのまなざしの共鳴

「まなざし」。この言葉をもう少し具体的な言葉に置き換えてみると「子どもの表情、内面の表れ、個性的な表現」と捉えることができる。さて、従前から言われてきている「生きる力を育む教育」を考えるなら、まず、子どもの主体的な学習を抜きにしては考えられない。その子どもの主体的な学習の軸となるのが「A君は今どのような考えを持っているのか」「Bさんは今どのような思いで学習に望んでいるのか」など子ども一人ひとりの情意面を知ることである。この情意面の思考を学習を通して子ども相互の活動の中で活用していくことに他ならない。そうすることで、その子の学習に対する願いを授業の中に生かし、位置づけることができる。そして、私たちはその子に対する願いや期待を授業でぶつけていくことも可能になる。主体的な学習の中核を担うものは子どもと子どもの意見のやりとり、交流にある。そのためにもお互いのまなざしを共鳴させていかなければならない。

子どもたちが、個々の問いをもとに共鳴をしながらそれぞれの学びを進めていたとしても、その学びがさらに進めば、自ら関連を求める。その時期や方法、方向といったものを見定めるためにも、私たちは子どもとそのまなざしを共有することも忘れてはならない。“まなざしを共鳴する”ということは、子どもの考えと子どもの考えを交流させるだけでなく、私たち自身も子どもとともに考え、追求（追究）していくという姿勢で学習に立ち向かうことである。

生活科学習で主体的な学習を誘うには子どもが活動にのめり込み、その活動の中から育った問題意識を大切にすることである。そのためには、子どもたちの思いや願いを育てること、育った思いや願いが実現に向けて取り組んでいけるという意識を持たせることである。「大きくなあれ」の学習において子どもたちは自分の野菜を育てた。いつものように畑に行って世話をし、教室に戻ってその時間のまとめを行った。A君は「僕のなすびに実がついていました。とてもうれしかったです。」と報告してくれた。それに対してB子さんは「まだ大きくなっていません。」と今回の様子を言ってくれた。同じ野菜であっても環境や世話の仕方によって成長にばらつきがあるのは大人なら理解できる。でもここでB子さんは「どうしてちがうだろうか？」という疑問、いわゆる問題意識を持つことになった。この疑問を解決するために「聞く」という活動に、学習が展開することになった。子どもたちのまなざしを共鳴させることで、追求から追究へと学習がひろがっていった。もちろん、教師自身も子どもたちのまなざしを学習の場面、場面において絶えず何に意味を求め、どんな内容に学ぶ喜びを感じているかをさぐり続けなければならぬ。